

紹介

『徂徠集序類』余言

高山 大毅

澤井啓一氏・岡本光生氏・相原耕作氏との共訳である『徂徠集 序類』（1・2、平凡社、二〇一六―一七年）が刊行された。本書は、荻生徂徠の「序」四十篇の原文・書き下し文・訳注を収める。

最初、澤井氏から訳注の企画の話を聞いた時、前途の遼遠なることを思い、正直なところたじろいだ。既に澤井氏・岡本氏が八割程度の訳注稿を紀要に発表しているとはいっても、含蓄の多い徂徠の文章を一般読者にも分かる訳文に解きほぐし、的確な注を施すのは難事業である。今回の訳注が完成に至ったのは、ひとえに編集を主導した澤井氏の力による。私自身は数篇の文章の基礎作成と全体の修訂作業を担当しただけなので、補佐役として本書の刊行に協力したに過ぎない。そのため、著者として本書を紹介するには、私は適任ではないと思う。しかし、補佐役の立場だからこそ書ける事柄もあるかと考え、筆を執る

ことにした。

なぜ「序類」なのか

本書については、「なぜ「序」類のみの訳注にしたのか」とよく尋ねられる。「訳注者まえがき」にもあるように、「序」は執筆年代の特定が可能であり、徂徠の思想・文学の変遷を考える上で「指標」となり得るというのが大きな理由である。また、離別の際に書かれる「送序」からは徂徠の交遊圏を、書物に附される「書序」からは当時の学芸の状況を知ることができるのも利点である。

さらに、もう一つ理由を挙げられると私は考えている。それは、「序」の読解技術は、他の文章形式（「文体」）にも応用可能であり、『徂徠集』に取り組むのに「序」は最良の入口である——という理由である。

漢文脈の世界において文章は、「論」・「記」・「贊」・「説」といった「文体」に分かれており、それぞれの「文体」の型に準拠して執筆されるのが通例である。徐師曾『文体明辨』によれば、「序」には「議論」・「叙事」の文の両方が含まれる。文章を「議論」と「叙事」に大別する議論は、「訊文筌蹄題言十則」の中で徂徠も展開しており、また『四家雋』の評語において徂徠は韓愈らの「序」に「叙事」と「議論」の両要素を見出している。このような意識で書かれた徂徠自身の「序」も「議論」と「叙事」の二つの要素を含んでいる。よって、「序」の読解

に慣れると、「議論」に特化した文（「論」など）、「叙事」に特化した文（「紀事」など）も読むのが容易になる。

徂徠の文章の難しさ

徂徠の文章はしばしば難解であるといわれる。訳注作業を通じて気づいた読解のコツについて記したい。

『徂徠集』所収の文には、人名・地名などの固有名詞や難解な語彙について調べても、すっきりと内容を理解できないものがある。この種の文章の多くは、「達意」よりも「修辞」に力点を置いた作品である。

徂徠の文章の「修辞」を読み解くには、文章全体の柱となっている表現上の構想を把握することが肝要である。「広陵問槎録序」を例に取りたい。

『広陵問槎録』は、広島島の味木允明とその門人の寺田鳳翼が朝鮮通信使と応酬した詩文を編纂した書物である（詳しい経緯は『徂徠集序類』の注を参照されたい）。徂徠の「広陵問槎録序」は、漢代の枚乗「七発」の言葉を用いて、広島湾の波濤を描写する。また、末尾では、鳳凰に関わる表現を用いている。この文章の柱となっているのは、広島＝広陵という見立てである。漢詩文の中で広島はしばしば、中国風に「広陵」と称されていた。「広陵」という地名は中国にあり、枚乗「七発」が広陵の川の激しい波の様子を描いていることで有名である。つまり、広島→広陵→枚乗「七発」→波濤の描写——という連想がこの

文章の軸となっている。さらに、鳳凰に関係する表現は寺田鳳翼にちなんでいる。

このように地名から着想を得て作品を構成することは、徂徠学派の詩に見られる。詳しくは、胡正怡「地名表記から見る漢詩の作り方——古文辞派を中心に」（『国語国文』第八十二巻十一号）を参照されたい。人名についても同様のことはいえ、遊戯的にも見える地名や人名の漢風化は、詩文制作の上で重要な機能を果たしているのである。

本書の「解説」で澤井氏は、歌舞伎の「世界」になぞらえて、徂徠の文章表現の特徴を説明している。妥当な見解であると思われる。「修辞」に凝った徂徠の文章は、江戸期の趣向重視の文芸と同様に捉えて読んだ方が分かりやすい。この種の文章は、細かな語義の詮索よりも、どのような見立てや連想が文章の柱になっているのかを見極められるかが、読解の鍵となっている。そこで本書の注釈は、文章の趣向の問題についても解説することに努めた。

また、徂徠の連想が自在に展開することも彼の文章の理解を難しくしている。徂徠の奔放な想像力のあり方については、「序」類の文章ではなく、「峡中紀行」の中の一場面を例に挙げたい。

徂徠は、小仏峠を通過した際、谷間に人影を見かけた。それを郭璞の「遊仙詩」に登場する仙人ではないかと思った徂徠は急いで谷へと下る。しかし、人影の正体は、その地に住む、檻

襷をまとった貧しい庶民で、徂徠に同行した人々は愕然とする。しかし、「痴想」の止まない徂徠は、もともと餚のように柔らかくても俗人に出会おうと固まってしまう石髓（仙薬の一種）があるのだから、仙人も我々に出会って乞食の姿に化けたかもしれない——と語り、みなから笑われる。

この話に見られるような想像の膨らませ方、そしてそれを楽しむ感覚——ノリといっても良いであろう——は「序」類の文章にも見られる。このようなノリで徂徠の連想がしばしば飛躍することを知らずに、ひたすら理詰めで読もうとすると徂徠の文章は上手く理解できないことがある（『送香洲師序』や『桃源薬序』がまさにそういう文章である）。

人の意表に出る見立ては、徂徠の思想を考える上でも重要かもしれない。「送守秀緯適大垣序」は、学者としてではなく、医者として大名に仕えることになった弟子の守屋峨眉（守秀緯）の出処進退を擁護する文章である。この文は日本思想大系の『荻生徂徠』にも収録されているように、思想史研究の観点から見ても興味深い内容を有している。徂徠は、「道」を行なうために出仕するといった古代の出処進退の説は、政治体制が異なる当代にそのまま当てはめられないと述べる。班田制のあった古代なら出仕せずとも生計を立てられるが、当代は仕官しないと糊口の資は得られない。生活の基盤があるという点で、出仕して俸禄を得ている当代の下級武士や医者は、班田を受けた古の庶民に対応する（「今之仕猶不仕」）。つまり、守屋峨眉

は出仕していても古代の基準では処士と同じ境遇であり、「道」を行なえるかどうかを問うべき立場ではないと徂徠は説く。このような軽業的な論法は、意外な見立てという枠組で捉えることも可能であろう。

注釈について

『徂徠集』は江戸期から注釈書が編纂されている。典拠については釈義端『徂徠集便覧』・仲奥南蘊『徂徠先生文集解』が参考になる（『徂徠集便覧』は慶應義塾大学図書館所蔵本をインターネットで閲覧できる）。文章構成については、『濠文談広疏』が必読である（『亀井南冥・昭陽全集』第六巻に収録されている）。

本書の注釈は、訳注者が検討した事柄の結論だけでなく、論証の過程や推測、現段階での調査の限界なども記している。そのため、「読む事典」と称される事典になぞらえれば、「読む注釈」とでも呼ぶべき注釈になっている。積極的に訳注者の手の内を明かすことで、後学が我々と同じ作業を繰り返す手間を省くことができたと考えている。

このような体裁で注釈をまとめ上げたのは澤井氏である。私は面倒を避け、明確に分かったことだけを書くやり方で、担当部分に注を施したので、澤井氏は大幅に内容を増補し、校正ゲラが戻ってきた時には注の文章の長さが二倍近くになっていた。文献を博搜するだけでなく、先行研究を要約し、引用した漢文には現代語訳を付すといった骨の折れる作業を着実にこなす氏

の仕事ぶりにはひたすら圧倒された。

澤井氏は、『日本思想史』の研究史を回顧して、「ただ、やはり七〇年代にいくつもの出版社からだされた原典資料集において、書き下し文や現代語訳、それ以上に注釈の作成に関しなかつたことの「雪辱」はまだ果たされていないように思われる」と語っている（『コメント』『日本思想史』は存立可能なのだろうか?、『日本思想史』第四十八号）。「雪辱」は果たされたのではなからうか。

以上のようなことは、まるで内輪褒めのように見えるかもしれない。しかし、今回の仕事を振り返る時、私が一番考えるのは、澤井氏が示した注釈の水準を今後どう継承していくか——という問題である。その答えは、論ではなく何らか訳注によって示されねばなるまい。前途はなお遠い。

（駒澤大学専任講師）